SPAC 秋▶春のシーズン 2019-2020 #2　令和元年9月14日第10号

すぱっく新聞

かおがみえるえんげきのしんぶん

新聞題字・宮城聰

“ペール・ギュントたち旋風”アジアを北上中

目まぐるしく変化する世の中で己を見失わないため、アイデンティティを巡る旅に出る〝ペール・ギュントたち旋風〟が、この夏インドネシアのとある島で発生。十一月初旬、静岡に上陸する模様。

『ペール・ギュント』は、落ちぶれた豪農ギュント家の放蕩息子ペールが「皇帝になる!」と故郷を飛び出し、年老いて帰ってくるまでの奇妙な冒険を描いた、ノルウェーの劇作家ヘンリック・イプセンの代表作だ。戯曲が発表されたのは一八六七年、当時のノルウェーは、発展途上の農業国で、ヴァイキングを祖先に持つ彼らの中には、ペールのように成功を夢見て祖国を出た者もいた。

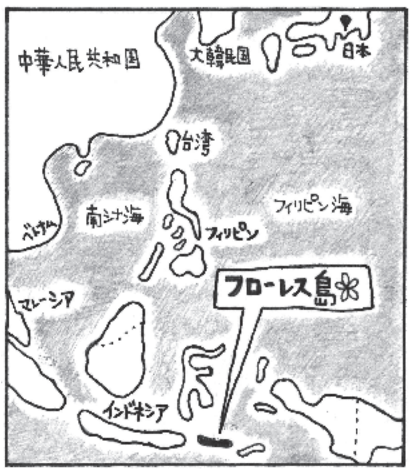
一九世紀のヨーロッパで書かれたこの荒唐無稽な物語を、グローバル化により様々な価値観が複雑に絡み合う現代に重ねたのは、SPACとのコラボレーションが、今回二作目となるインドネシアの演出家ユディ・タジュディンさん。

十一月、静岡上陸へ

多種多様な民族や宗教から成り、近年の急速な経済成長で混乱を増すアジアに着目し、タジュディンさんをはじめ、インドネシア、日本、スリランカ、ベトナムのアーティスト十名は、『ペール・ギュント』同様、アイデンティティを巡る旅に出ることにした。

こうして〝ペール・ギュントたち旋風〟の中心と化した彼らは、この夏インドネシアのフローレス島と東京に上陸を果たし、地域の人々を巻き込みながら、現在、静岡に向かっていると見られる。静岡ではSPAC俳優六名が加わり、更なる風が巻き起こる。世界的な展開も期待される〝ペール・ギュントたち旋風〟を、静岡芸術劇場で目撃していただきたい。

（文・制作部 計見葵）



しかじか

【わくらば】病葉。病におかされた葉。嫩葉。若い葉。古くは「邂逅」と書いて「わくらば」と読み、「たまたま、偶然」の意になる。

＊＊＊

病に蝕まれた葉と瑞々しい若葉とをひとつの語が表せる不思議さ。この言の葉を、海外の人に伝える難しさもまた面白い。（サキコ）

SPAC芸術総監督 宮城聰のひとこと

©Ed TSUWAKI

ユディはほんと凄いです。何のお膳立ても無しに芝居をつくってます。つまり彼は「社会」をつくってます。

原作 ヘンリック・イプセン

演出

ユディ・タジュディン

以下 共同創作

パフォーマー／ダンサー／振付家

川口隆夫

俳優

美加理

サウンドアーティスト／作曲家

森永泰弘

俳優／パフォーマー

アルシタ・イスワルダニ

ドラマトゥルク

ウゴラン・プラサド

振付家／ダンサー

ヴェヌーリ・ペレラ

俳優／ダンサー

ムハマッド・ヌル・コマルディン

ヴィジュアル・アーティスト

グエン・マン・フン

俳優／作家

グナワン・マルヤント

出演 共同創作アーティスト および SPAC

大内米治

舘野百代

宮城嶋遥加

佐藤ゆず

牧山祐大

若宮羊市

スタッフ
照明デザイン イグナシアス・スギアルト
衣裳デザイン 駒井友美子
舞台監督 内野彰子
技術監督 村松厚志
演出部 武石守正、山崎馨
通訳 相磯展子、水野響
照明操作 小川哲郎、久松夕香
音響 右田聡一郎、竹島知里
美術担当 佐藤洋輔、吉田裕梨
ワードローブ 佐藤里瀬
制作 ルシア・ネティ・チャヤニ、中野三希子、計見葵
プロデューサー ラマ・タハラニ

SPAC秋→春のシーズン 2019-2020 #2

『ペール・ギュントたち～わくらばの夢～』 Peer Gynts - Asylum's Dreams

会場：静岡芸術劇場

一般公演日 ［日本語／英語字幕］ With Japanese ／ English subtitles

11月	9日［土］	14:00	Ⓐ	東京バス
	10日［日］	14:00	Ⓗ Ⓐ	浜松バス
	16日［土］	14:00	Ⓑ	
	17日［日］	14:00	Ⓑ	

関連企画

プレトーク：一般公演日の開演25分前より

Ⓐ **アーティストトーク** ※登壇者は決定次第、公式サイトにて発表
終演後にトークを開催。

Ⓑ **バックステージツアー**［参加無料／要予約］
終演後、創作・技術部スタッフが舞台裏をご案内。

Ⓗ **はじめての演劇鑑賞講座**［参加無料／要予約］
12:30～13:30　講師：永井健二（SPAC俳優）

観劇バス 定員あり

こりゃ楽ちん！申し込みはお早めに！

【東京バス】11月9日［土］
渋谷発 9:30 → 劇場着 13:00〔片道1,000円〕
【浜松バス】11月10日［日］
浜松発 11:30 → 劇場着 13:00〔片道500円〕
申込締切：11月6日［水］
申込先：名鉄観光サービス（株）静岡支店
TEL:054-286-5681（平日9:30～17:30）

お帰りの便は、トーク終了後に出発いたします。

会員募集中！

2019年度 SPACの会
年間3公演ご招待！
チケット割引や先行予約など特典あり。
【年会費】
個人会員……10,300円※
ゆうゆう個人会員（満60歳以上）……9,300円※
※9月30日までに年会費をお支払いいただく場合。
◎2019年10月1日より年会費を【個人会員：10,500円、ゆうゆう個人会員9,500円】に変更させて頂きます。ご理解の程、よろしくお願いいたします。

中高生鑑賞事業「SPACeSHIP（スペースシップ）げきとも！」 静岡県内の中高生を対象に招待公演を行っています。【下記の日程は一般販売のお席もございます（枚数限定）】
11月11日［月］13:30｜14日［木］13:30・18:00｜18日［月］13:30｜19日［火］13:30

◎チケット発売日

SPACの会 会員先行予約	9月21日［土］	10:00
一般前売り	9月28日［土］	10:00

◎チケット料金

一般	4,200円
SPACの会 会員一般	3,500円
ペア割引	3,700円（一般2名様で1枚につき）
ゆうゆう割引	3,500円［満60歳以上］
学生割引	2,000円［大学生・専門学校生］ 1,000円［高校生以下］

※この他、グループ割引、障がい者割引がございます。
★静岡県内の小学生ご招待（1公演5名様まで）

◎購入方法

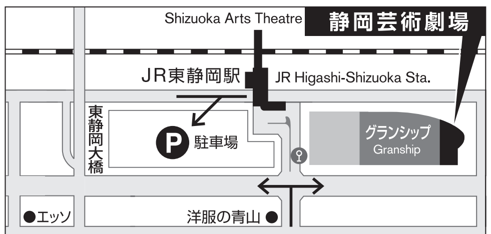
SPACチケットセンター（10:00~18:00／休業日を除く）
TEL.054-202-3399
SPAC公式サイト、劇場窓口でもご購入いただけます。
セブン-イレブン 店内のマルチコピー機をご利用ください。

未就学児との入場はご遠慮ください。
親子室をご利用いただけます。
※要予約／詳細はSPACチケットセンターまたは公式サイトにて

製作：SPAC-静岡県舞台芸術センター　共同制作：テアトル・ガラシ／ガラシ・パフォーマンス研究所
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）｜独立行政法人日本芸術文化振興会、（一財）地域創造
<Multitude of Peer Gyntsプロジェクトに対し>
助成：国際交流基金アジアセンター、インドネシア創造経済庁（BEKRAF）、（公財）セゾン文化財団
協力：東フローレス市役所
2019年度イプセン・スカラシップ受賞プロジェクト

◎アクセス

静岡芸術劇場 静岡市駿河区東静岡2丁目3-1（グランシップ内）
▷ JR「東静岡駅」南口より徒歩5分
▷ お車の場合はグランシップ一般駐車場をご利用ください。



◎主催・お問い合わせ

SPAC-静岡県舞台芸術センター
TEL:054-203-5730 FAX:054-203-5732
E-mail:mail@spac.or.jp
SPAC公式サイト［JP／EN］
https://spac.or.jp

SHIZUOKA PERFORMING ARTS CENTER
芸術総監督 宮城聰
スパック＝静岡県舞台芸術センター

演出家のことば

ユディ・タジュディン

ペールが映す アジアの今

ープロジェクトについて教えていただけますか？

アジア各国から創作の軸となる「キーアーティスト」が集まり、インドネシア、東京、静岡で作品を作っていきます。SPACからは俳優の美加理さんが参加しています。

まず始めに、インドネシアのフローレス島の東端にある小さな町、ララントゥカでワークショップを行いました。この地は、植民地時代の影響が今も色濃く残っていて、外から入ってきた宗教、国や政治の介入などによって、伝統的な信仰や文化の存続が危ぶまれた歴史を持っています。

ーなぜ『ペール・ギュント』なのでしょう？

アジアは、新たな混乱の時期を迎えているように思います。グローバル化やインターネットの発達により複雑化する社会を、私たちはどのように生き、立ち向かうべきなのか。自分たちのアイデンティティを改めて問い直す必要があると考えました。混乱した状況に身を置く私たちと、旅を通じて新しい世界とおのれ自身に対峙する『ペール・ギュント』に共通性を見出したのです。

ーワークショップでの成果は？

ララントゥカから船で近隣の島々にも出掛け、リサーチや、表現活動を行う地元の方々とのワークショップ、そして、お互いをより深く知るための話し合いを行いました。そこで私たちは、国籍や生きてきた背景はそれぞれ違っても抱える問題の核は同じなのではないか、という結論に至りました。

最終日、野外ステージで海を背景に成果発表を行いました。その海岸は、かつての王宮と、島に流れ着いたマリア像が祀られている小さな教会が隣り合い、島の歴史と文化を象徴する場所です。島の歴史を踏まえたパフォーマンスに、現地住民や政府関係者から素晴らしい反応を受け取ることができ、次の創作地・東京、そして静岡に向け、多くの収穫がありました。

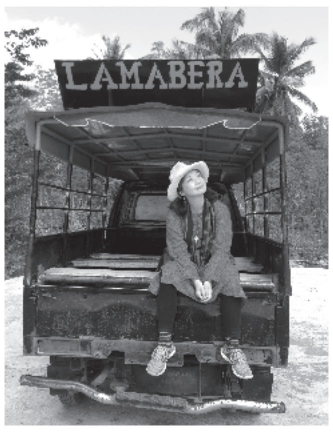
海沿いの野外ステージで行われた成果発表。リハーサルの様子。（中央は川口隆夫）

ユディ・タジュディン

演出家。インドネシア屈指の芸術家集団、テアトル・ガラシ／ガラシ・パフォーマンス研究所の創立者の一人で芸術監督。演劇、ダンス、ビジュアル・アート、音楽など分野を横断したプロジェクトを多数手掛け、SPACでは『サーカス物語』を演出（2013、2016年）。マイブームは、ジャカルタにある日本風?!ハワイ料理のお店。

言葉を超えて伝わるもの ～「花の島（フローレス）」での出会いから～

フローレス島での約二週間のワークショップに招かれた俳優の美加理。メンバーとともに、伝統の儀式や祭りに触れ、離島や岩山の上にある村々を訪れ、現地の人々や文化からたくさんのものを頂いた、と語ります。中には言葉を超えたこんな出会いも…。（聞き手・制作部 中野三希子）



◇ディスカッションを「身体で聞く」

ワークショップの序盤では、それぞれの文化や個人の体験などをシェアしました。時には、政治や宗教に対する憤りや哀しい出来事など、重たい話題になることも。言葉自体は通訳を介していますが、彼らが語るのを直接自分の身体の内側で聞いて、咀嚼して…。車座になった仲間たちの顔や仕草を見ながら感じたのは、「きっとこれらはみな、姿を変えた私自身であるのだなあ」ということ。こうして作品創りの種蒔きが始まりました。

◇民家に突撃訪問?! そこで踊りが生まれる

路地を歩いていると、不思議な形の植物が目に留まり、その家の人が出てきてくれました。聞けば、そこは昔の大洪水で家を追われた人たちが興した地域なのだとか。家の中にはアチェの津波で亡くなった船乗りの弟さんの写真も飾られていました。そこで〈洪水の歌〉を聞かせてもらったんです。歌が始まると自然に身体が呼応して、即興で鎮魂のダンスを踊らせていただきました。そのダンスは、あとに創る小作品につながっていったんです。

フローレス島でのワークショップの様子（中央が美加理）

幕間

心を燃やして

国際ことば学院日本語学校
校長 野田敏郎

私の職場は、駅から一〇分の閑静な住宅街にある日本語学校だ。三階建ての小さな建物に六つの教室があり、留学生たちが大学進学などの目的で通っている。

「先生、日本人はご飯にお茶をかけて食べるんですね。あれ、変です」ミャンマーのA君が言った。留学生は町で観察したモノやコトをよく教室に持ち込む。居酒屋でお茶漬けを食べるのを見たようだ。「私の国なら、ご飯の上には甘いマンゴーですね」彼は懐かしそうな目をしてそう言った。

ことばは、その言語を使う人のことを「学ぶ」のである。何気ない日常の瞬間に学びがある。言語学習というと、教師が教え、生徒が習うというイメージがあるが実際はそうではない。この学校は、何らかの変化を求め、自国を飛び出した者が集う広場だ。学びの原動力は、それぞれの心の中にある。心を燃やしてことばを学ぶのだ。

「日本人と中国人の見分け方は簡単です」中国のW君が言った。「日本人は、歯並びが悪い人が多いです。それは、歯医者が多すぎるからです」

隣の同国の女子学生が中国語でWに何か言っている。多分たしなめているのだろう。しかし、ここで礼を欠くなどと叱ってはいけない。お互い、好奇心を大事にしようじゃないか。

SPACアウトリーチ「多言語リーディング・カフェ」

ナビゲーター：関根淳子（SPAC俳優）

原作『ペール・ギュント』を、さまざまな言語で声に出して読んでみよう♪
対象言語：日本語、英語、インドネシア語、ベトナム語、ポルトガル語
10／11（金）19:00～ カフェ・シンデレラ（静岡芸術劇場内）
10／27（日）14:30～ 浜松市鴨江アートセンター

詳細はSPAC公式サイトへ！

静岡で味わう ペールの故郷 ノルウェー kirkekafe bakeri

シリケカフェ・バーケリ（静岡市／馬渕河区）

永井さんご夫妻。店名は、ノルウェー語で"教会のカフェベーカリー"の意。

ペールを生んだ風土とは？ 静岡芸術劇場の近くにあるノルウェーパンのお店を切り盛りする永井美香子さんに、ノルウェーの人や暮らしについてお聞きしました。

海と山に囲まれたノルウェーでは、人々は自然を誇りにし、生活もいたってシンプル。痩せた土地でも育つライ麦などを原料にした滋味深いパンが、食の中心にあるそう。他の北欧の国と比べてもノルウェー人は自由な発想を重んじ、交渉事も得意。その気質はヴァイキングから受け継いでいるのだとか。

永井さんご夫妻はアンデブーという小さな村で、美香子さんが福祉の仕事をし、ご主人の匠さんがパン作りを学び、帰国後に長野でお店を開店、昨年静岡市へ。チャレンジ精神旺盛なお二人からも、ペールの精神を感じました。（文・制作部 坂本彩子）

社会学者＆SPAC文芸部 大澤真幸の その時代

1867年

一八六七年当時、ノルウェーという国民国家はなかった。スウェーデン王が支配していたからである。ノルウェーがスウェーデンから独立し、ノルウェー独自の王をもつようになったのは一九〇五年だ。では、ノルウェーがスウェーデン王のものになった一八一四年より前はノルウェーという独立国があったのか、というと、実はこれも違う。一六世紀の前半からずっと、デンマーク王がノルウェーを支配していたからだ。

すると、ノルウェー人は四百年近くも外国に支配されていた気の毒な国民だ、と考えそうになるが、実のところ、そのようなイメージは実態にあわない。ヨーロッパの人々が、みなそれぞれいずれかの国民（〇〇人）であるという強い自覚をもつようになったのは、一九世紀になってからである。この自覚とともに、王も国民の一員であるべきだという意識も出てきた。「我々ノルウェー人」という同胞意識はスウェーデンによる支配によって作られた、といっても過言ではない。

編集後記

創作中の舞台を「新聞」で解体するのはとても難しい。海にふわふわと漂う生物のように、触れるに触れられない怖さもある。

それでもなお新聞を作る。生体を観察し想像を重ねると、海のことを考えるきっかけにもなる。古典戯曲がそれを可能にしてくれている。

（制作部 坂本彩子）

すぱっく新聞 第10号
一面情報欄デザイン 阿部太一（TAICHI ABE DESIGN INC.）
以下制作部
組版 計見葵
編集（演目担当）中野三希子、計見葵
（広報班）坂本彩子、内田稔子
西村藍
（手書き隊）永井健二＆編集部